

Ⅲ 臨床事例に見る子供たち

第Ⅱ章では、前研究報告書に引き続いて、学校で見られる気がかりな子供たちを予備群まで枠組みを広げて見てきた。中核にある気がかり群と、その周辺の予備群の子供たちを「自由記述」からとらえると、心理的に非常に気がかりな状況にあることが分かった。

本章では、問題が形成されるまでの過程や前兆となる事態に主眼をおいて、臨床事例の分析を行うことによって、第Ⅱ章と併せて、学校における「気がかりな子供たち」と如何にかかわるべきかの基本となる視点を探っていく。

1 分析対象事例について

本研究で分析対象とした事例は、平成14年度から平成19年度にかけて、すべて本研究担当者が来所相談や学校支援で本人もしくは保護者とかかわった思春期事例のうち、心理的な「生きにくさ」を抱えた事例を取り上げた。総数は、計31例（男子：16、女子：15、中学生：4、高校生：27）である。さらに、直接かかわっていないので、上記の例数には入れていないが、教師相談や校内事例検討会でのコンサルテーション事例も分析対象に加えた。

今回の分析では、学校のかかわりがとらえられる事例を対象を絞っている。内訳は、①学校支援事例：10例 ②学校支援から来所相談となった事例：6例 ③来所相談事例：15例である。なお、③来所相談事例は、学校からの紹介によるものが多い。

事例の主訴は、平成17～18年度実施の意識調査の「気がかり群」として想定される子供たちの「生きにくさ」を示すものであり、具体的には自殺念慮、自殺企図、リストカット、解離症状、うつ状態、こだわり、逸脱行為などである。

2 事例分析の方法

分析は、各事例について個票を作成して行った。個票は、来所事例では、初回面接時の状況（主訴、問題状況、本人のとらえ方）、家族の状況、問題発症直前の状況（前兆と考えられる行動・エピソード、前兆に気付いたキーパーソン、本人のとらえ方）、生育歴上の問題・エピソード、来所相談後の回復過程（問題状況の変遷、かかわり方・相談の経過）、本人の内的状況（葛藤の様相、内的力量、対人関係能力、興味・関心）をとらえた。

学校支援事例では、前兆（きっかけ、身近な死の体験）、学校情報（出席状況、欠時数、成績・学習態度、保健室利用、スクールカウンセラーの利用、表情・たたずまい、友人関係、異性関係、周囲の子供の認知度、エピソード、トラブル）、内面の表出（大人、友人、ブログ、調査票、感想文）、学校の対応、教師との関係、家庭の様子、親子のコミュニケーション、医療・相談歴をとらえた。

個票の分析を基に、①学校で見られる子供の様子 ②問題の成り立ちと子供像 ③学校のかかわり（ア 本人とのかかわり イ 保護者とのかかわり ウ 関係機関との連携）と項目立てし、まとめた。

なお、提示する事例は、個人情報保護の観点からいくつかの事例を複合したもので、具体的なエピソードには大幅な変更を加えてある。

3 思春期危機にある子供たちの諸相

(1) 死への傾斜を抱えた子供たち

幸い一命はとりとめているが、家庭あるいは学校で自殺を図った子供たちである。この中には二つのタイプがあり、一つは家庭でも学校でも目立った行動がなく、おとなしく自己表現が少なく、保護者も教師も全く気付かなかった事例 <気付かれにくい子供たち> である。もう一つは「死にたい」気持ちを表現し、様々な自殺企図の行為を行い、保護者も教師も対応している事例 <自殺未遂を繰り返す子供たち> である。

ここでは、死への傾斜を抱えた子供たちについて考察する。

<気付かれにくい子供たち>

事例A (高校3年・男子)

A男は幼少期よりおとなしく、気持ちの表現が苦手で、母親に駄々をこねることもなく、反抗らしい反抗もなかった。学校では欠席・遅刻もなく、成績も上位だった。高校2年では運動系の部活動の部長になった。頼まれると断れず、部長には負担感があったが、特には誰にも言わずにいた。高校3年になり、大学へ進学することは決めていたが、学部が決まらず、「自分が何をしたいのか分からなくなった」「勉強する気が起きない」と次第に成績不振に陥った。

高校3年の6月、担任は個人面接で、進路が決まらないことから「どうしたのか」「大丈夫か」と聞いたところ、本人は「頑張ります」と答えただけであった。7月の期末試験前、本人は薬物を多量に服薬したが、一命はとりとめた。

両親は本人が何でも自分でやってきていたので任せており、本人が悩んでいるとは全く思っていなかったと言う。教師も早く気付いてやればよかったと悔やんでいる。

① 学校で見られる子供の様子

このグループの子供たちは、気持ちの表現が少なく、学校では極めてまじめで目立たず、遅刻や欠席もなく、追いつめられた気持ちを周囲に気付かれずにきた例が多い。対人関係の面では友達が少なく、自己主張をあまりせず、受動的で断れないタイプの子供たちである。過去にいじめられた経験をもつ子供もいる。A男の場合、教師は、進路先が決まらず、成績も振るわなくなったことには気付いていたが、A男が追いつめられていることは、自殺未遂という事態が発生して始めてが分かったと語っている。

② 問題の成り立ちと子供像

このグループの子供たちは、おとなしく、何を考えているのか分からないと保護者が語るように、自分の気持ちを表現しない。子供たちの中にはいじめられている子供もいるが、それを保護者になかなか話さず、また、反抗することもなく、手がかからない子供として育てている。保護者はまじめな子供を頼りになる存在として、本人に任せている部分が多かった。A男の場合は、高卒後の進路のことで「自分が何をしたいかわからない」と悩み始め、勉強に取り組めなくなり、さらに理想の自分と現実の自分のギャップが広がっていったと考え

られる。

思春期はどの子供も自我同一性が拡散しがちで、「自分とは何だろう」「自分は何がしたいのか」などと悩むことは多い。一般的には友達、家族、教師に支えられながら、生き方のモデルを見つける。しかし、A男の場合は、誰にも相談せず心理的な支えが得にくかったと思われる。そして進路を決定しなくてはならない時期が迫り、追いつめられたと考えられる。

自殺の問題は、様々な要因が複雑に絡まっていると言われている。理解するには、「直接的契機(きっかけ)」と「準備状況」との関係をとらえなければならない。

A男の自殺企図の直接的なきっかけは進路に関する悩みであるが、その過程に準備状況として、家族の支えの弱さ、親子の心理的なずれ、友人関係の少なさ、自己表現の乏しさから、周囲からの支えがなく抑圧的な状況があったと考えられる。

このグループの子供たちは、自殺企図の直接的なきっかけや準備状況は様々であるが、誰にも自分の悩みを相談せず、他者の支えが得られず、気付かれにくい子供たちであった。

③ 学校のかかわり

学校では目立たずに、表現しないタイプであり、欠席や遅刻という表に現れる動きもなく、子供の変化や内面が見過ごされがちである。自殺未遂という事態になって、初めて緊急に対応している。

ア 本人とのかかわり

本人たちは、自殺未遂後、医療機関に受診している。中には、その後カウンセリングのために相談機関へと治療の場が移行しているものもある。自殺の危険因子の中で、自殺未遂の経験は重要な因子であり、命を取り留めたものの、適切なケアがないと同様の行為を繰り返す可能性があると言われている。

専門機関での治療が必要であるが、専門機関にかかったからといってすぐに再発を防げるものではない。したがって、学校は本人の状況をよく把握し、かかわり続ける教師の存在は不可欠である。また、見守っていく学校体制づくりが求められる。

このグループの子供の自殺の未然防止のためには、クラスで孤立しがちな傾向のある極めておとなしく目立たない生徒を、教師が意識的に目を配り、普段から声をかけていくことが大切である。このことにより本人が話しやすい大人として教師を認めれば、追いつめられているサインを少しでも教師に見せる可能性があるからである。

イ 保護者とのかかわり

このグループの場合、どの保護者も自殺未遂が起こって初めて本人の内面に触れる。子供の状況に、「なぜこんなことをしたのか」「こんなふうには悩んでいるとは思わなかった」という保護者が多い。学校は、保護者から家庭での様子を教えてもらうと同時に、何か心配なことがあったら連絡をくれるように伝える。サインをつかみにくいだけに、学校と家庭とが連携を取り合い、子供を見ていくことを約束する。保護者も様々な事情を抱えており、子供を支えられない場合もあるので、そのような時にはまず保護者を支える必要がある。

ウ 関係機関との連携

事態が発生する前には、専門機関にかかっておらず、事態発生後、精神科を含む医療機関、あるいは相談機関にかかることになる。学校は保護者の了解をとり、医療機関の見立て、治療の方法、今後の方針を聞き、学校で留意することを確認する必要がある。また、保護者自身が子供を支える状況にない場合、家族の全体的な状況を把握し、医療のみならず、福祉の側面から、保健所、精神保健福祉センター、子ども家庭支援センター、児童相談所、福祉事務所等の支援も視野に入れ、学校として多面的にその情報を得ておくことが必要になる。学校が本人・保護者を支えていく方法について、事前に教育相談機関や精神保健福祉センターなどに相談し、検討しておくことが望まれる。

<自殺未遂を繰り返し、様々な症状を呈する子供たち>

事例B（高校1年・女子）

B子は高校に入学早々から体調不良、過呼吸を訴え、たびたび保健室に通い、養護教諭に「死にたい」と話をしてきた。担任はB子の了解のもと、保護者に連絡を取ろうとしたが、連絡が取れなかった。5月、家で多量服薬自殺を図るが、幸い未遂に終わった。担任は何とか母親と連絡を取り、医療機関を勧め、B子は受診した。しかし、保健室に来る回数は増え、6月には学校でリストカットをした。B子は医療機関の投薬が多すぎることに不信感から通院しなくなっていた。学校は教育相談機関、精神保健福祉センターの助言を得ながら、新しい医療機関を探した。B子は何回も保健室から飛び出し、屋上から飛び降りようとし、「死にたい」を繰り返した。一時も目を離せない状況である。新しい医者には入院治療が必要と判断されているが、家庭の支えが得られにくい中、学校は病院、教育相談機関、精神保健福祉センター、保健所と連携を取りながら、対応している。

① 学校で見られる子供の様子

このグループの子供たちは、中学生の時から、過呼吸、自傷行為の繰り返し、摂食障害、強迫症状、家出、解離症状（意識の消失など）、異性へのしがみつき（ストーカー的行為）、多量服薬、飛び降りなどの自殺企図、自殺行為のそぶり、自殺行為の脅し、暴力などの様々な症状をもっている。「死にたい」と希死念慮を教師に訴えたり、意識がとんでいるうちに自殺行為を行うこともある。また、B子のように多くの子供は教師に訴え、教師を頼っている。また、成績や学習などに全く関心がない子供もいれば、出席や成績にこだわりがあり、良く勉強をする子供もいる。表面的には、話す友達もおり、習慣的な行動はきちんとできる子供もいる。

② 問題の成り立ちと子供像

幼い頃から保護者の養育が十分とは言い難く、養育放棄、心理的虐待に加えて、身体的暴力を受けている子供が多い。また、他人の中を転々として育てられたり、家の中が壊され刃

物で追われたりして、日々息を殺して生活してきた子供たちもいる。両親の関係が壊れている家族も多く、物理的にも心理的にも親としての養育機能が不全の状態、「あんたなんか生まなきゃよかった。死んでしまいなさい。」などと頻繁に言う親もいる。

長年の被虐待の結果、思春期の子供たちに虐待のフラッシュバックが起こる場合や、自分の行動の記憶が全くなくなるような解離症状といった新たな症状が発症している場合もある。

このグループの子供たちは、医療機関では「境界例パーソナリティ障害」と診断されている者がおり、幼児期の母子関係の不安定な状態により、ちょっとしたストレスや不安を感じただけで人から見捨てられるのではないかと思ひ、自らを守ろうと行動化（自殺行為など多様な行動）を起こすと言われている。そして、様々な形で教師を揺さぶってくることもある。

このグループの子供たちの内面は、不安感や抑うつ感が高く、時に自暴自棄的な気分になる。家族や友だちとの親和性は低く、自己肯定感も低いと予想される。しかし、子供たちの中には、家族にはあまり支えられていないが、教育相談機関の担当者、医療機関の医師、学校の養護教諭や担任、そして友達に支えられることによって、なんとか頑張っている子供もいる。

③ 学校のかかわり

学校では担任や養護教諭を中心に、事例検討会を開き検討をしているところが多い。このグループの子供には医療機関の受診が必須のことと考えられるが、子供によって医療機関を受診している者、受診していない者、中断している者がいる。学校は様々な症状を示す子供の行動について保護者と情報の共有化を図り、医療機関との連携の承諾を得る必要を感じている。しかし、連携の取れない保護者が多い。したがって、このグループの子供たちの対応には、家族全体の状況の厳しさから、医療機関や他の専門機関との連携・ネットワークが必要である事例が多い。

ア 本人とのかかわり

このグループの子供たちには、教師が長時間、相談にのったり、毎日保健室で対応している学校がある。死をもって訴えかける彼らの気持ちを受け止め、なんとか落ち着かせようと必死になり、対応するが、巻き込まれ疲労困憊してしまう教師は多い。しかし、教師は振り回されていることを意識しておくことが巻き込まれない方法の一つである。振り回されつつ、距離を保ちながら、枠組みをもつことは難しいことであるが、必要なことである。例えば、時間の制限、場所の制限などの枠を決めたら、常に一定の対応をすることである。時間や曜日を指定して、定期的に対応するなど、一定の制限をかけることである。そのような安定したかかわりの継続が、教師への信頼感を獲得させ、本人の成長につながる。

仮りに、子供が枠やルールを越えると、かかわっている教師の負担感が増え、子供に対して否定的な感情がわき起こる場合がある。教師の否定的な思いは子供に伝わり、さらに、子供は訴えかけたり、すがりついたりするようになる。そうすると教師はますます負担感が増え、対応できずに、回避的になる。そうなる子供は見捨てられたと感じ、行動化が

エスカレートする。家族に見捨てられ、周囲の大人が回避することにより自殺行為に及び既遂になった事例がある。「『死にたい』と言っている子供は死なない」という間違った情報を教師が得ていたり、子供の行動を「いつものこと、引きつけ行為で、甘えているだけ」などと思っていたりすると本人を自殺に追い込むことがある。

最終的には教師一人で抱え込まずに、学校全体で事例検討会を開き、事例を共通理解し、役割分担をして全校体制で臨むことが必要である。

イ 保護者とのかかわり

このグループの子供たちは、様々な症状があるために、学校は保護者に連絡をしている場合が多い。一人で帰宅することが危ぶまれる場合には、保護者に迎えを依頼する。また、家での様子を聞き、医療機関と学校との連携を行うことの了承を得たりする。しかし、なかなか連絡が取れない場合や、保護者が学校に頼りきりになる場合があり、保護者の中には養育すること自体が困難な場合もある。

このような場合、学校は相談機関（教育相談機関、児童相談所、精神保健福祉センター、子ども家庭支援センター、保健所等）にかかわり方の助言を得ることが必要である。その上で保護者に医療機関、教育相談機関を紹介したり、場合によっては福祉の利用の仕方を説明することが必要である。入院が必要な事例であると医師が判断していても、本人、保護者の納得が得られないことがある。本人、保護者には「学校で多量服薬やひどい自傷行為を行ったら、命を守るために救急車を呼ぶことや、飛び降りなど自殺行為に及んだ時には警察を呼んで命を守る必要がある」等の約束を伝える必要がある。

ウ 関係機関との連携

このグループの事例は学校だけで抱えていくことは難しい。医療機関を始め、多様な機関の協力が必要な場合が多い。まず、子供が医療機関に受診することが決まったら、保護者の了解を取り、事前に当該の機関に紹介の趣旨を伝えておくと、子供、保護者は受診しやすい。医療機関も事前に情報があると、子供の様子や経過が把握しやすく、診断や治療の方針が立てやすい。

子供と保護者が医療機関に通い始めたら、保護者の了解をとり専門機関に連絡を取る。さらに、その医療機関を訪問し、子供の状態、見立て、治療の方針等を聞き、学校での対応の助言を求める。本人が自らをコントロールすることができず、自傷他害的な行動にエスカレートする時には、入院治療となる場合もあるので、学校は医師に事態の状況を正確に伝えるとともに、継続的に連携をすることを約束することが大切である。さらに、複数の機関が協働する必要性が出てくれば、ネットワークを構築し、関係機関が一堂に介して検討することが必要となる。

(2) リストカットを繰り返す子供たち

様々な葛藤状況に置かれ、日々満たされない思いを抱く中で、緊張感が高まった時、イライラ感を解消し、つかの間の安らぎを得ようとするかのように、リストカットを行う子供たちがいる。ここでは、リストカットを繰り返す子供たちについて考察する。

事例C（高校3年・女子）

以前から、頭痛、腹痛、不眠など、様々な身体症状を訴えて保健室を訪れていたC子は、高校3年に進級した頃、両親の不仲が表面化し、父親が家を出ていくという事態にあった。C子は混乱し、頻繁に保健室に来室し、両親に対する複雑な思いや、高校3年という進路選択の大事な時期にある自分のことなど誰も何も考えてくれないという不満を、養護教諭に語った。C子は保健室を毎日訪れては、長時間保健室で過ごすようになった。夏休み明けに保健室に現れた時には、休み中に家でリストカットをしたことを話した。母親は、気付きながらも「気持ち悪い。見せないで。」とC子の苦しい状況を受け止めることをせず、C子はそのことに傷ついていた。10月には、授業中に過呼吸発作で倒れたり、リストカットをしたりして、保健室に駆け込むことが増えてきた。さらに11月には保健室の養護教諭の目の前でリストカットを繰り返すようになり、養護教諭は相談機関につなげた。

① 学校で見られる子供の様子

リストカットを学校でとらえることは比較的容易である。子供が隠す場合もあるが、見つけられてもかまわないというように、教師や級友の前で傷口をさらしたり、傷の手当てを求めてきたりする場合もある。リストカットを繰り返す子供の中には、「死」そのものが目的なのではなく、リストカットによって自らの悩みや大変さをわかってほしい、自らの存在を認めてもらいたいという叫びと考えられる事例が多い。リストカットをする子供には、それ以前から、無断欠席、保健室登校、頻繁で長時間の保健室利用などが目立ち、併せて頭痛、腹痛、不眠、体調不良、落ち込み等の心身症の訴えがみられる。

② 問題の成り立ちと子供像

家でリストカットをした時、親に心配されるよりも、とがめられたり、無視されることが多く、時には拒否される場合もある。むしろ子供の方が親を気遣って、リストカットをしていることを知らせないようにすることも多い。いずれにしても、親がそのことをきちんと取り上げて、子供と向き合うことは稀で、問題に直面しない。症状の程度は様々であるが、背景に家族の問題が存在していることが多い。いわゆる家族英藤の高い中で、子供はその英藤に巻き込まれ、振り回されているばかりである。親は子供の心の状態には無関心で、無視したり、一方的で支配的なかわりとなったりする。その結果、子供は家庭内に自らの居場所を定められず、学校など家の外でリストカットをするなど、何らかの問題行動を示すことによってしか、自らの心の危機的な状況を訴えることができなくなっている。

リストカットは、思春期という自我同一性確立の時期にあつて、子供自身の進路選択の時期や、家族の離反、病気、経済的逼迫など、危機的な状況に遭遇した時に、心理的な葛藤状況が加速され、緊張が高まって起きると考えられる。

リストカットをする子供たちの内面をみると、幼少時から情緒的に不安定な状況に置かれ、常に抑うつ感を抱えている。様々な場面で成就感をもった体験に乏しく、自己肯定感は低い。誰にも受け止められない、分かってもらえないという気持ちが強まると、自暴自棄的な気分が強まり、攻撃性が内側に向かうとリストカットに至る。その時、内在している攻撃性は高まるが、家族との「支配-抑圧関係」が強い場合には、攻撃性は低く押さえ込まれ、不安感や抑うつ感はより高まっていくと考えられる。

また、リストカットは男子より女子に多くみられる。家族関係の確執があり、父親との関係に問題が生じている場合も多く、大人の男性との関係の乱れが見られ、男性教諭を過度に嫌ったり、必要以上に追いかけてたりすることがある。友人関係でも、同性より異性の友人関係が学校の内外で優先される。学校ではなかなかとらえ難いが、援助交際の経験も少なからず見受けられる。対人関係の距離の取り方が難しい子供たちである。

③ 学校のかかわり

ア 本人とのかかわり

リストカットが発覚すると、周囲は驚き、傷の手当てをするところから始まる。「どんな思いでリストカットをするに至ったか」を受け止め、聴いていく。C子のように、リストカットをする前から養護教諭に訴えているような場合は、言葉で訴えて分かってもらうだけではものたりず、より問題が緊迫した状況になったことを伝えようとする。リストカットは「今、私は大変なのよ。こちらを向いて」というサインであり、大人が向かい合うことを求めているのである。そして、受け止めてもらえることが分かると、生徒は待たなしに、さらに際限なく大人の対応を求めてくる場合も多く、養護教諭が疲労困憊することにもなる。

リストカットは、“分かってほしい、認めてほしい”というサインであり、そのサインに対して関心が示されなくなれば、子供は見捨てられた気持ちになる。それゆえ学校はかかわりを継続する必要がある。そして、学校では、教師が一人で抱え込むのではなく、保健室から担任、学年、校内と広く多くの目で、本人のかかわりの中心になっているキーパーソンを支援、子供を見ていくことが肝要である。子供がこのような心理的な危機状況にあるとき、よき大人との関係の中で、受け止められ、抱えられることを体験することが重要である。

イ 保護者とのかかわり

学校は、保護者に対して、キーパーソンである養護教諭、担任を中心に、生徒が示す行動について、学校全体で心配していること、子供に働きかけていく必要のあること、学校と家庭が協力していくことが重要であること等、理解を求めることから始める。

ここで問題となるのは、学校でリストカットを行い、教師が保護者に連絡を取ろうとす

ると、親に知られるのを極端に嫌う子供がいることである。子供は、自分の大変さを分かってもらいたいと思いつながら、「親に心配をかけたくない」と親を気遣う。そこにその家族の問題の核心があるのだが、学校がそのような保護者とかかわっていくのは大変難しい。学校はまず子供に対して、保護者に分かってもらうことの意味を伝えることから始める。子供が納得した上でなければ保護者とかかわることは難しいからである。

ウ 関係機関との連携

C子の場合、養護教諭は早い段階から相談機関と連携を図り、C子についての見立てやかかわり方について助言を求めていた。そのコンサルテーションの過程で、子供、親を相談機関につなげるタイミングや方法について考えることが可能となった。関係機関とつながった後も、学校は、学校の役割を果たしつつ、相談機関との関係を保ち、子供の成長のための協議を重ねていくことが重要である。

(3) 「不登校」の中にある“うつ”症状を示す子供たち

「不登校」といっても、その様相は様々であるが、中には学校へ行かないというだけではなく、うつ病を疑うような症状を併せもっている子供たちがいる。明らかにうつ病と思われる症状を呈しており、放っておけないほどであれば医療機関にかかることになる。そしてそこでの薬物療法によって改善されることが多い。しかし、学校にも行かず、医療にもかからずに過ごしている不登校の子供たちもいる。これらの子供たちは、やはり生きにくいと感じている子供たちと言える。ここでは、“うつ”症状を併せもっている不登校の子供たちについて考察する。

事例D（高校再2年・女子）

D子は、高校入学後も合唱を続けたいと合唱部に入部し、仲間もできて1年の時は楽しく学校生活を送っていた。しかし、2年のクラス替えで、自分勝手な言動がまかり通るようなクラスになると、元来まじめなD子は、部活動中心だったこともあり、いつしかクラスにとけ込めないような感じを覚え、「自分がいけないんだ」と努力はするものの、息苦しさを感じたり体調を崩したり眠れなかったりすることが増えてきた。それでも部活動を休むと他の部員に迷惑をかけると思ったD子は、遅刻しながらも登校していた。2学期の終わりに欠時数オーバーのため進級が難しくなると、決意して他校の2年への編入試験を受けることにした。編入後は心機一転して休まずに登校し、数人の友達もできて1学期の間は元気に過ごしていた。しかし、徐々に友達の輪が広がってくると雰囲気も変わっていき、D子は前に経験したのと同じ息苦しさを感じ、再び友達と一緒に過ごすことが苦痛になり、早退したり欠席したりするようになった。再スタートがうまく切れたと思っていた担任はD子を一生懸命励ましていたが、欠席は増える一方であった。家では昼夜逆転の生活で、夜中はインターネットばかりして過ごし、何に対しても意欲がなくなってしまった。ついには食欲までもなくなり、心配していた母親がD子連れて初めて医療機関を訪れた。

① 学校で見られる子供の様子

このグループの子供たちには、学校でまじめに取り組む姿が見られる。学業にも部活動にも積極的であって、いじめにあったりするということもなく、それなりに友達がいたりする。しかし、ある時から成績が徐々に落ちたり、元気がなくなったりという様子が見られ、次第に遅刻・早退・欠席などが目立つようになり、不登校に発展している。

② 問題の成り立ちと子供像

このグループの子供たちに共通することは、まじめであることと責任感が強いことである。家庭環境や生き立ちは違うものの、「頑張り屋さん」である。さらに、繊細さを併せもっていたり、プライドが高かったりすることもある。また、息切れ、発汗、頭痛、不眠などの身体症状が出たり、過食や拒食という摂食異常を起こしたりしている。口数の少ないおとなしい子供も積極的な子供もいるが、概して「いい子」たちであり、自由気ままに好き勝手なことができる子供たちではなく、周囲に気を配り、気疲れしやすい子供たちである。D子がそうであったように、浅く広く適当に付き合っていけばいいと考えるような集団では生きにくいタイプではないかと思われる。D子は、自分の問題は自分で解決しようとするあまり、一人で葛藤を抱え苦しんでいる。そして、努力してもうまくいかないと体に反応が出てくる。このグループの子供たちは、うまくいかないのは自分の責任であると考え、絶望感をもち、将来に希望がもてなくなってしまう。また、不登校になると、昼夜逆転したり、意欲喪失とみられる生活を送る子供たちが多く、外出については、一切出なくなる子供もいれば、母親と一緒にあれば誘いに応じて映画を見に行ったり、習い事にだけ通っていたりする子供もいる。しかし、概して人目を気にするところがある。友人関係については、元来まじめで責任感が強いので、友達から頼りにされることはあっても、拒絶されることは少ないと思われる子供たちが多く。

このグループの子供たちは、不安や抑うつ的な感じが強く、絶望感が転じて自暴自棄になることもある。しかしながら、特徴的なことは、「不登校」であっても家にいられるということである。子供にとって家庭・家族は決して悪いものではないと言える。多くの母親が子供の姿を気にし、父親も子供のために時間を割き、両親がそれぞれ何とか支えようとしている。最終的に医療機関や教育相談機関につながるのも、こうした親の努力であり、そのことは子供たちも分かっていることが多いようである。

このことが、このグループの子供たちにとっては、「自分が親に迷惑をかけている」という自責の念に拍車をかけることにもなり、親子共に苦しんでいるとも言える。

このグループの多くの親が我が子のことを考えているが、子供が「見離されている」と感じるような親がいないわけではない。学校にもいられず、家庭にいても孤独感にさいなまれるならば、この子供たちはどこに身の置き場所を求めたらよいのだろうか。行き場を失って自殺を考えるかもしれないし、「まだ学校にいる方がまし」と考えるかもしれない。もしそうであれば、先の(1)に取り上げた<気付かれにくい子供たち>に近づいていくのではないかと考えられる。

③ 学校のかかわり

このグループの子供たちは、遅刻・欠席という出席状況に目に見える変化が起こるまで学校では気づきにくい子供たちである。時に体調不良を訴えて保健室を訪れることはあっても、それ以外の事前のサインは見つけにくい。それは本人が自分の中で葛藤しており、自分で何とかしようとするので表には現れにくいことによる。

ア 本人とのかかわり

遅刻・欠席をした時のポイントは、声かけである。いわゆる「明るい不登校」と言われる子供たちには、先生からの真摯な励ましが有効である場合が多いが、このグループの子供たちには、休ませまいと叱咤激励することは、本人を追い詰めるだけで有効ではない。たとえば「この学校はどう?」「どうした?元気がないな。」という本人自身に関心を向けた声かけが有効である。そうした声かけをきっかけに、子供が心を開いてくれることを待ちたい。この子供たちは体に変調をきたすことが多いので、養護教諭の声かけの方が本人は心を開きやすいかもしれない。本人が再挑戦をしているような場合は、同じ挫折を味わいたくないと、知らぬうちに過剰適応に陥りやすい場合もある。担任は、頑張ろうとする意欲を認めながらも、無理をしなくても大丈夫という安心感を与えるようにするとよい。

このグループの子供たちは、先のように尋ねられれば「楽しいよ」「平気」などと答えてしまうが、よく見ていると辛さや苦しさが表情に現れていることが多い。明るく元気にふるまっていた後や友達と一緒に過ごした後に、疲れた表情や暗い表情が見えた時には要注意である。彼らはぎりぎりのところで、遅刻や欠席をしながら学校生活を送っていることを忘れてはならない。

また、専門機関につながっても、自分が学校の先生から既に忘れられた存在だという気持ちにならないように、声をかけていくことが大切である。はがきや電話などで、「どうしている?」「元気にしている?」など関心を示すメッセージを伝えることが大切である。

イ 保護者とのかかわり

学校で頑張る分、家庭に帰るとどっと疲れた様子を示すことも多い。家庭で変わった様子が見えた時には、保護者と連絡を取りかわすことができるような関係を築いておきたい。原因探しをするのではなく、子供に安心感を与えるかかわりが、周囲の大人たちに要求されている。その点では、家庭と連絡をする際に、保護者が学校からの連絡を受けて、保護者自らが子供を叱咤激励したのでは子供は逃げ場を失ってしまう。重要なことは、保護者を安心させて、孤立させない言葉かけである。「ゆっくりでいいですよ」「まずは元気を取り戻して、学校のことはそれから一緒に考えましょう」など、子供に寄り添っていてほしいと伝えることが大切である。

また、抑うつ的な症状が出てきていると思われるような場合でも、我が子が病気だとは思いたくないために医療機関に抵抗のある保護者も多い。こうした場合、子供を病気扱いするのではなく、「早く診てもらった方が回復も早いから。」と保護者に伝え、医療機関を紹介することも大切である。

ウ 関係機関との連携

基本的には家庭で、本人なりの立ち直りを期待したいが、難しい場合は、医療機関や相談機関につないでいくことが大切である。特にこのグループの子供たちは、放っておくと、自分で無力感や絶望感を募らせかねない。保護者と連絡を頻繁にしつつ、その様子を聞きながら、医療機関や相談機関に行くことを勧め、具体的に医療機関を教え、つないでいくことが必要である。

(4) こだわりを示す子供たち

学校の中で気がかりな子供たちの一群に、興味・関心や生活パターンにこだわりがあり、対人関係が不器用で、しつこくし過ぎたり、パニックを起こして自傷他害に及んだりする子供たちがいる。思いがけない唐突な行動を見せるこのような子供たちについて考察する。

事例E (高校1年・男子)

E男は、入学当初から遅刻・欠席もなく、提出物もきちんと出し、図書委員になって図書室の本の整理を毎日行っていた。普段はおとなしい性格だが、夏前に一度、「他の図書委員がきちんと仕事をしない。並べ方がいい加減だ。」と突然怒り出してしまったことがあった。

夏頃、彼女ができ、楽しそうに話す様子が見られていた。しかし、文化祭後にその彼女が担任に「E男とは別れたのに、1日数十通ものメールを送ってくる。だんだんエスカレートしてきて『みんなの前で謝れ』とか『ぶっ殺してやる』と書いてあるし、待ち伏せもされるし、怖い」と訴えてきた。E男に事情を聴くと、「彼女が急に会ってくれなくなった。文化祭前に『しばらく距離を置きましょう。それぞれ文化祭を頑張りましょう』と言われたので、僕は頑張ってクラス劇をやったのに、彼女はそれを認めてくれずに会ってもくれない。会ってちゃんと話したい。何で僕をこんなに苦しめるのか、許せない。」と怒っている。担任が「あまりしつこくするとストーカーと間違われるし、女の子は彼女だけじゃないのだから、もうメールや電話はしないように。」と指導しても、E男は「学校が、彼女と僕がもう一度きちんと話し合う場面を設定してくれないのはおかしい！納得できない！」と声を荒げ、この怒りを数週間訴え続け、学校でもどう対処してよいかわからず困っている。

① 学校で見られる子供の様子

このグループの子供たちは、視線が合いにくかったり表情が暗かったりして、同性の親しい友達があまりおらず、いたとしても表面的でやや孤立している印象がある。ルールを守り筋は通っているが、言い方がきつ過ぎたりして、友人関係のもち方が不器用な子供が多い。

身体運動も多少ぎこちないことが多いが、電車や時刻表、地図など特定の知識が大変豊富なこともある。相手がさほど興味をもっていない事柄についても自分の興味でしつこく喋りまくって、相手を辟易とさせてしまうこともある。

中には、記憶力が優れていて、成績が優秀な子供や特定の分野（運動、パソコン、楽器演奏、数学・科学・語学・歴史・法律など）で高い能力を見せる者もいる。完全癖、頑張り過ぎから、遅

刻ができなかつたり、一晩でノート1冊を使い切るほど勉強したりする者もいる。一方で疲れ切ったり、友人とのトラブルで、感情の起伏が大きく、突然欠席することもある。

自分なりのスタイルやイメージがあり、異性との交際に対しても幻想を抱き、E男のように相手が自分のイメージ通りにならないと、分かってもらいたいとしつこく電話やメールをし、まとわりつく。それでも受け入れられないと、極端な激しい攻撃性を示すこと（リストカット、自殺未遂、死ぬ、殺すなどの脅しなど）もある。また、一生懸命にやったのに友達が理解してくれないとか、成績不良、留年、大学不合格などによって不安が高まってきた時には、不安から一気に自暴自棄的な行動を取ることもある。

② 問題の成り立ちと子供像

このグループの子供たちは、問題の根底に発達障害などの要因を抱えている。音や形、味などに敏感であるなど認知が特異で、興味・関心の幅が狭く、こだわりが強い。行動がパターン化しやすく、非常にきまじめでルールを遵守するが、柔軟性がない。また、E男と彼女のことも分かるように、対人関係が不器用で、会話のニュアンスを解せず文字通りの意味に受け取りやすい。「全か無か」の極端なところがあり、柔軟に融通を利かせることが苦手である。本人にとっては我慢に我慢を重ねた上のことだが、傍から見れば唐突にパニックを起こすように見える。

以上のような元々の発達障害の特徴のために、小学校の時からからかわれたりいじめられたり、先生や保護者から叱られることが多く、思春期になる頃には、被害感を抱いたり、兄弟や同級生に強いコンプレックスを抱いたり、自信のなさや自己否定的な発言が目立つことが多い。一方、自分は何か人と違うという違和感や、また自信のなさの裏返しから、強い万能感やプライドをもったり、自分が理想とするパターンや基準にあてはまらない相手を見下して嫌悪したりすることもある。このような二次的に起こる情緒的な問題から、さらに不適切な対人行動をとってトラブルを起こしがちになる。

③ 学校のかかわり

ア 本人とのかかわり

発達障害がベースにあると思われる子供は、特異な認知、感覚、能力をもち、違和感や苦痛を抱えながら苦勞して集団生活を送っている。このグループの子供たちは、その行動だけ見て理解しがたい問題生徒であるとか、いじめられるのも仕方のない生徒と勘違いされやすい。しかし、上述したような行動特徴がいくつか見られたら、その行動を頭から注意することは役に立たない。そうしないとられない本人なりの感じ方や考え方のパターンやルールがあるのかもしれないと考えて、スクールカウンセラーや教育相談機関など、発達障害や精神症状の見分けのできる人や機関に相談するとよい。

仮に、発達障害があっても、まずは信頼関係を築いてからという基本的なかかわり方に違いはない。特に発達障害がある場合には、何かトラブルが起きた時に、教師が否定的にならずじっくりと時間をかけて本人の言い分や気持ちを聴くことによって、その教師の言葉なら比較的素直に耳に入るようになる。カウンセラーや専門家に相談しながら、特徴に応じてパニッ

クやトラブルが起きる前に声をかけたり、違う考え方をする人や予定が変わることもあることを教えていく。また、イライラした時のための逃げ場を作ったり、「望ましくない行動」に代わる「望ましい行動」を具体的にわかりやすい端的な言葉で教えていく必要がある。

彼らはこれまで納得しがたい状況下でいじめられたり叱られたりすることが多かったため、すっかり自信をなくしている。彼らの、まじめで、ルールを守り、興味あることや決められたことは精一杯頑張るという良い面を認め、その都度言葉にして評価することによって、教師との良好な信頼関係が作られ、再び適切な自信を取り戻せるように働きかけることが望ましい。

イ 保護者とのかかわり

本人に自閉傾向がある場合、保護者のいずれかが本人同様に、または本人以上に情緒的でないか、我が子も含めて人への関心がなく自分の趣味に没頭したりすることがある。また、一旦不安になると情緒的に非常に不安定になり、パニックを起こしたり攻撃的になったりすることがある。保護者が本人の相談相手にならないこともままたり、元々本人が自分のことを語らず、感情の起伏が大きいので、親も腫れ物に触るように、深追いしない習慣になっていることも多い。

可能ならば学校は、保護者から本人の生育歴を聴き、本人の認知や行動の特徴について学校と家庭が共通理解し、扱いにくく難しい子供を抱えて苦労してきた保護者に共感し、保護者を支えていくことができるとよい。教師という立場で難しいならば、保護者だけでもスクールカウンセラーや教育相談機関につなげるのが求められる。これらの機関と連携を取りながら、本人の特徴と起こりうる問題について常に保護者と話し合い、事前に対策を練って本人に大きな打撃を与えないよう予防していくことが大切である。そして、本人の個性を生かした自信をもたせる事柄作りがポイントとなる。

進学や就職などの進路の選択については特に注意が必要である。本人の得意なものを生かし、苦手なものには逃げ場があるような、加えて本人の特性について理解が得られる環境を慎重に選ぶことが必要となる。

彼らは、オブラートで包んだような曖昧な言葉は理解しづらい。出会い系サイトの異性の甘い騙し文句を真に受けたりしてトラブルに巻き込まれる心配もあるので、特に女子については、気を付けるよう保護者に伝えることも必要になる。

ウ 関係機関との連携

教師にとって、このようなグループの子供たちのこだわりや硬さに付き合いつつ、他の生徒との関係を悪くしないように調整していくのは、大変な我慢強さと根気が必要となる。担任が一人で抱え込むことなく、校内全体でその子供の特徴を理解し、対応方法の統一が図れるよう、教育相談機関や思春期専門医の助言を得ながら対応を工夫することが大切である。

また、卒業や進路変更に当たっては、本人や保護者がその後相談できる専門機関(教育相談機関、医療機関、保健所、精神保健福祉センターなど)につなげるのが求められる。

(5) 逸脱行動のある子供たち

学校の中で気になる子供たちの一群に、校則を守らなかったり、暴言を吐いたりする子供たちがいる。暴力行為はないが全体にやる気がなく、教師に反抗的で、夜遊びなど逸脱行動を繰り返しながらも学校に来ている子供たちについて以下に考察する。

事例F (中学3年・男子)

F男は、小学生の頃から面倒なことをコツコツ努力するタイプではないので、中学校の勉強は次第にやる気をなくしていた。テニス部に入ったものの練習もサボりがちとなり、ついには嫌気がさして退部してしまう。これまでは付き合いのなかった部活動に入っていない仲間や他校生と遊ぶようになり、急速に成績が下がった。派手な格好に憧れ、色々なものに首を突っ込むが長続きせず、次第に夜遊びがひどくなっていった。遊びに行くたびに数千円を母親に要求し、拒まれると「学校なんか辞めてやる!」と脅したり、暴力を振るうことも出てきた。学歴志向の高い父親は「負け組になりたいのか!まじめに勉強しろ!」と一方的に怒鳴り、F男も黙っていられず、殴り合いになった。母親は事故が起きることが怖く父子を対決させないようにし、父親も仕事が忙しいという理由から家に帰らないことも増えていった。

母親が担任に相談しても、「思春期は大人に反抗して育っていくものだから、しばらく様子を見ましょう」と言われるだけだった。しかし、F男の行動はエスカレートし、プチ家出、喫煙、バイク乗り回しと非行が進み、遅刻・欠席も増えてくる。たまに登校しても、茶髪にピアス、ズボンも腰ばきで、補講も受けず、担任も庇いようがなくなってしまった。

① 学校で見られる子供の様子

このグループの子供たちの場合、初めは単なる怠け癖や生意気な態度が見られる。教師が生活指導の中で「まあ大したことはない、そのうち落ち着くだろう」と放置しているうちに、いつの間にか急速に反抗的になり、手に負えなくなることがある。

具体的な行動や現象としては、部活動を辞める、遅刻や欠席が増える、眠そうで授業に身が入らなくなる、提出物を出さなくなる、成績が急降下する、今までと付き合う仲間が変わる(女子の場合、異性へ急接近することもある)、髪型や髪の色、眉毛、制服、ピアスなど服装が乱れてくることなどがみられる。

② 問題の成り立ちと子供像

このグループの子供たちの場合、生い立ちや家族関係が大きな要因として浮かんでくることが多い。学歴志向の高い家庭で、親や親戚が「こうあるべき」という狭い価値観にとらわれていることもあるし、また、その逆に全く放任という家庭もある。子供の側からすれば、親の期待する文化の押し付けであったり、反対に全く期待などされていないように見える場合もあり、両極端である。しかし、共通しているのは、本当の意味で子供に向き合い、子供と話し合ったり、共に行動したりするということが少ないということである。

前者(過干渉型の親)の子供たちは、夫婦関係や親子関係に不自然さや偽物っぽさ、本当の信頼関係のなさを感じ、親の価値観への挑戦として、逸脱行為やサブカルチャー、アウトサイダ

一へ傾倒し、“我が家の異分子”という形で問題提起をしているとも言える。親はそれが受け入れられず、「どうしてこんな出来の悪い子供を生んだのか」「出来損ない」「落伍者」など、人格を否定するような言い方をして、さらに子供を傷つけることもある。しかし、一方では、親は現実から目を背けたり、気付かない振りをしたり、本人を怒らせないように言いなりに金品を与えたりして、正面衝突を避けることも多い。本人も親に反抗しながらも経済的にはずっと甘やかされてきて依存が強く、また親の価値観に自分自身も縛られており、家から飛び出して自立することもできない。その悲哀感から逸脱行為をさらにエスカレートさせて行く。

後者(放任型の親)の子供たちは、親から気にかけてもらえない寂しさの中で、「とりあえず楽しければいい」と不良仲間との表面的な付き合いに流れ、結果的には親と同じような刹那的でだらしない生活をさらにエスカレートさせて行くものと思われる。女子の場合には同性との関係ができ上がる前に、異性関係に逃げてしまう傾向も見られる。

また、このグループの子供たちの中には、幼い時から好奇心旺盛で多動傾向があり、突飛な遊びをしてはよく怪我をしたり、新しいもの、面白そうなもの、派手なものが好きで、やりたいたいと思うと待てずに行動したりして、地味にコツコツ努力することが苦手というタイプの子供もいる。こうした発達障害を疑われるようなタイプの子供は、先の見通しが悪く刹那的に行動しがちで、叱られたり非難されたりうまくいかないことが多く、なぜ自分はこうになってしまうのかと、自分でももて余してしまい、自我同一性の確立がさらに難しくなりがちである。

③ 学校のかかわり

ア 本人とのかかわり

本人の表面的な問題行動のみにとらわれることなく、本人の内面の生きにくさを理解した上で声かけをすることが大切である。彼らは、狭い価値観や偏りをもった保護者の価値観から逃げたくてもがいていることもあるし、自分に目を向けてもらいたいと必死になっている場合もある。彼らには、保護者とは違う柔軟な価値観をもった、普通の大人のモデルが必要であり、教師はその最も適したモデルとなり得る。突っ張る彼らの人格を否定したりすることは、子供の心を開かせることには役立たない。どんなことを考え感じているのか、彼らに興味をもって話を聴き、「でも遅刻するなよ。待ってるぞ。」といった声かけが望ましい。そして、保護者が見出せない本人の長所を見つけて、本人を励まし、保護者にもそれを伝えていくことが大切である。

イ 保護者とのかかわり

逸脱行動が目立たないうちは、「反抗は思春期にはよくあること」「一過性のもので、そのうち落ち着くだろう」と考えているが、非行が急速に進むことがある。

保護者にとっては思いもよらないことで、時には夫婦のせめぎ合いになってしまうこともある。保護者にとっては「こんなはずではない!」「なぜ?」と現実を受け入れられず、付き合っている仲間や先輩のせいにして、我が子や自分たち家族のあり方に目が向かないことがある。このグループの保護者たちの中には、非行が進み、手に負えなくなったり、出席停止などの学校からの指導があつて初めて事の重大さに気付く場合もある。

そうならないためには、教師は「最近やる気がなくなっているな」など早い段階で気付けば、まずは保護者と連携を図り、学校外での様子を聞かせてもらうことが必要である。どのような場合でも、保護者はそれぞれ我が子にどうかかわったらよいのか困っているのので、保護者を責めることなく、本人への対応の仕方を学校と家庭で話し合っって協力体制をつくるのが大切である。

保護者は、子供の非行の全てを洗いざらい学校に伝えることにより、学校側から偏見をもたれたり排除されたりすることを恐れている。また、本人が「学校にチクった」と怒り家庭内暴力や非行がより激しくなることを恐れ、深刻な状況を学校にきちんと伝えず、連携が取りにくくなりがちである。そういう時には、専門機関を紹介することも大切である。

ウ 関係機関との連携

親子間、夫婦間に価値観や考え方の食い違いがあったり、本人に発達障害が疑われるような場合には、スクールカウンセラー、教育相談機関、または、発達障害に精通している医療機関を紹介することが必要である。非行が進んでいる場合や、父親が毅然とした父性モデルを示せない場合には、地域の非行グループの状況などに詳しい少年センターや地域の警察の生活安全課少年係を紹介することも必要となる。

IV 思春期における気がかりな子供たち

今回の研究で、思春期の子供たちの意識をとらえ、その上で、心理的な“生きにくさ”を症状や問題として示している臨床事例を分析してきた。ここから、思春期全般の子供たちの心理を踏まえつつ、「思春期の気がかりな子供たち」の様相を、まとめて以下に示す。

1 調査がとらえた一般的傾向

昨今、私たちは当センターの臨床事例を通して「生きにくさ」を感じている思春期の子供たちに出会うことが多くなったように感じていた。そこで、思春期の子供たちが、今どのような思いで生きているかを改めてとらえようとして、「思春期の心理と行動に関する意識調査」を作成、実施した。その中から次のような思春期心性が見えてきた。

思春期は、親への反抗心や大人への不信感を抱き、それと向かい合い、自立に向けて試行錯誤していくことが課題であると言われていた。しかし、今回の調査に見る子供たちは、全般的に家族との親和的な関係を望んでいて、その中で支えられている状況にある。同様に、友達に関しても親密で友好的な感覚をもち、人とのかかわりを求めていることが分かった。

内面的には、全般に不安感や抑うつ的な気分を抱えていて、自分の取り組んでいる状況や結果によい感触をもつことがなかなか難しく、自己肯定感が低い状況にあると考えられる。

「攻撃性」については一定の傾向はとらえられなかったが、生産的なエネルギーとして発現される方向性を併せもつことを考えると、思春期の子供たちは、個々人の状況によって、エネ